

(六) ビーズの指輪

それは美しい粉雪こなゆきの舞ま이었다。

辺り一面の白の世界に、水銀灯すいぎんどうに照らし出された二人のゆっくり歩く姿があった。ホテルの玄関から駐車場までは、それほど長い距離ではないが、圧雪あつせつと降り積もる雪で非常に滑りすべやすくなっていたのである。

ビジネススーツのまま出てきてしまった百恵は、首筋せうくちや袖口そでぐちから入り込む寒気で、ひとつ武者震むしやぶるいをした。

「ほら、だから見送りなどいいと言ったじゃないですか？風邪かぜをひきますよ」

浩幸は自分のマフラーをとると、百恵の首まに捲まいた。

「すみません……」

浩幸は微笑ほほえむと、

「なぜだろう、貴方にはいつも僕の一番見せたくない素顔が見られてしまう……」

と、ぽつんと呟いた。

百恵はすっかり冷たくなった両手をビジネススーツのポケットにしまい込むと、右側のそこに何やら小さな硬い粒の塊の感触を覚えた。それがコスモス園への就職面接の前日、遠い回想の中で見つけたビーズの指輪であることはすぐに知れた。ポケットの中でそれを転がして遊びながら、五歳の時に求婚をした大学生の事を思い出していた。

やがて愛車のニュービートルの所に来ると、浩幸はドアに寄りかかり、黒の鞆から煙草を一本取り出して口にくわえた。次いでライターを取り出そうと再び鞆をこそこそやりだしたが、「あれ？ライター……」と言って、やがてコートのポケットなどを探し始めた。

百恵は浩幸の口から煙草を取り上げると、

「あまり吸わない方がいいですよ……」

と言って、足元の雪の中に埋めた。

「君はいつも僕がドキリとすることをしますね。不思議な人だ……」

「そうですか？」

浩幸は再び鞆から煙草を取り出して口にくわえ、再び鞆の中のあるはずのライターを探し始めた。

と……、

「なんだろう……?」

浩幸が鞆から取り出したのは、ビーズでできた小さなリングだった。

「なんだ?これは……?」

浩幸は首を傾げて、それをしまい込もうとした。

「待って……!」

百恵は自分の目を疑った。そしてビジネススーツから先ほど触っていたビーズの指輪を取り出して、浩幸の指先のリングと重ね合わせた。それはまったく同じ形をした、一對のビーズのエンゲージリングに相違なかった。

「どうして君がこれと同じものを持っているの?」

百恵は言葉を失い、しばらく浩幸の顔をじつと見つめた。

いくつかの粉雪が舞い落ちたろう。何万、何億……、果てしない粉の宇宙の中に、二人の姿だけが浮かんでいた。時の流れを数えれば、いったいどれほどの長さになるのだろうか?そして心の移り変わりの数を数えれば、一体いくつになるのだろうか……?地球上の砂の数を数えることができるだろうか?星の数を数えることができるだろうか?歴史の始まり

を数えることができるだろうか？そしてその終わりを数えることができるだろうか？ただ、時間的に、空間的に、精神的に、無限に広がる世界の一点に厳然とある事実こそ、二人の真実だった。

「あなただったのですね……」

やがて百恵が言った。

「どうということ……？」

「あなたがあの時の大学生だったのですね……」

百恵の瞳ひとみに氷りつきそうな涙が宝石のように光っていた。

「覚えていませんか？私は五歳で、あなたは大学生だった……。私のおばあちゃんの具合ぐあいが急に悪くなって、赤ヒゲ先生に来ていただいたの。その時私は席をはずされて外に出たわ。そしたらそこにあなたがいた……」

浩幸の脳裏のうりに一閃いっせんのひらめきが走った。それは張り詰める靄もやを一瞬に吹き払う突風のようにだった。靄もやの向こうに広がった世界は、総天然色そうてんねんしよくの花畑のように、寸分の忘却もない現実の世界であった。

「思い出した……。いや、覚えてる。僕はその日、母の危篤きとくを知らされて、大学の授業を

抛り出して帰省した。そしたら死にそうな母をそのままにして、父は往診で家にはいなかった。あわてて僕は父を探しに行ったんだ。しかし、ようやく父を見つけた時、僕は母の死の知らせを受けた。そう、確かに馬場さんというお宅の前だった……。ようやく涼しくなりかけた蝉時雨の鳴り止まない夕方だったね。今、思い出した。君と会ったのはその直後のことだった……。家の玄関から出てきた君は、少し驚いた顔をして僕をじつと見つめてた……。なぜだろう、こんな昔の話なのに、これほど鮮明に覚えているなんて……」

「そして私たちは遊んだわ。あやとりや手遊びやケンケンパーをして……。覚えてますか？」
「僕は母の死の悲しみから逃れるため、まだ幼かった君を愛して必死に遊んだ」

浩幸は普段なら絶対に見せない懐かしそうな表情で、百恵をじつと見つめ返していた。

「君だったのか……」

二人は降りしきる雪の中で、二十数年前の夏の共有の思い出を、無言のままでもたどるのだった。

「このビーズの指輪のこと、覚えてますか？」

浩幸は何度ももうなずいた。

「覚えてる……。君に『お嫁さんになってあげる』って言われた。僕はませている子になっ

て思った……」

「そして、あなたは言ったわ——、私が『二十歳になって、まだ、その気持ちが変わっていないかったら考えてもいい』って……」

「そう、確かに言った……」

「私、二十歳になりました。もう八年も過ぎちゃいました……」

百恵の瞳の涙が急に膨らんだかと思うと、次の瞬間落ちて、足元の雪の一部を溶かした。

「多分私は、ずっとあなたを待っていた。心の奥の『いのち』であなたを待っていた。だから、あなたをこんなに好きになってしまったの……」

「ちよつと待って——」

浩幸は次の百恵の言葉をさえぎった。

「今日は驚く事ばかりだ……。混乱して言葉も見つかりません」

浩幸は明晰な頭脳で、一連の出来事の話の筋を整理しはじめた。母の最後の言葉は「あなたのお嫁さんの顔を見たかったよ……」だった。百恵と出会ったのはその直後の事だったではないか。それは偶然にせよ、百恵から結婚を申し込まれたこと。幼い子どもの衝動的な発言だったにせよ、こうして二十年後の彼女と知り合っている事実。その上、彼女が自分を好

きだという事実。そればかりでない、自分の実の娘である美幸と彼女の弟が恋仲になっ
ていくこと。現実生活とは別次元で働く、何か得体の知れない力を感じずにはいられなかつた。
しかし浩幸にはそれを認める勇気がなかつた。結局「偶然」の二字に、その結論を導き出す
しかなかったのだ。

浩幸は煙草を吸うのを諦めて、それを鞆の中に収めた。

「偶然とは、重なるものですね」

浩幸が言った。

「偶然なんて本当にあるのかしら……。私は全部「必然」に違いないって思ってます……。
きつと世の中の人みんなが心の痴呆症にかかっているから、仕方ない事だけ……」

百恵が答えた。

「心の痴呆……?」

浩幸は首を傾げた。

「いったい君は何を知っているというのか?」

「私にも分かりません……。でも心の奥の、ずっとずっと奥の私が、浩幸さんのことを好
きだと言っている気がします……」

「いったい君は何者か……？天使か……、さもなければ悪魔か……」

「悪魔なんてひどい。私はただあなたを愛しているだけ……」

百恵は俊介からもらった婚約指輪をはずし、手にしたビーズの指輪とはめ替えた。

「君はまたそんな事をする……」

「私、やっぱり結婚しません。いえ、できません」

百恵は、自分を拒む浩幸の表情と全く正反対の表情を確認した時、思わずその身体に自分の身体を重ねた。

「やめなさい。人に見られたらどうするのですか？」

百恵は何も言わず、浩幸の胸で涙を流すだけだった。

ホテルの暗い一室から、その光景をじっと見詰める悪意の双眸そうぼうが光っていた。男はいやらしい笑みをひとつ浮かべると、手にしたデジカメのシャッターを何度も押した。